

V. 附 編

1. 山王遺跡発掘調査報告書 —集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

例言

1. 本編は個人事業者が大東建託株式会社つくば支店に委託する集合住宅建設事業に伴う、土浦市田村町字出口2096番5に所在する山王遺跡発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、事業者の委託を受けた有限会社日考研茨城（代表取締役小川和博）が発掘調査支援業務を行い、土浦市教育委員会が直営で実施した。調査期間は平成29(2017)年4月25日から5月7日まで、調査面積は56㎡である。
3. 発掘調査は亀井翼（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当し、島崎達也（同嘱託職員）が補助した。報告書は亀井が執筆した。
4. 発掘調査参加者
亀井翼、島崎達也、大久保由紀子、丸岡公子
5. 整理作業は、調査終了後の平成29年5月から平成30年3月まで実施した。作業員は小林圭子・高梨智恵子の2名である。
6. 本遺跡調査に関する資料は、すべて上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて保管している。なお遺物の記録や整理、保管に際して「TS1」の略号を使用している。
7. 発掘調査から報告書作成まで、以下の方々にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。
阿部倉豊明、茨城県教育庁総務企画部文化課、大東建託株式会社つくば支店

1. 調査に至る経緯と経過

当調査は個人事業者が計画し、大東建託株式会社つくば支店に委託施工する集合住宅建設事業に伴うものである。平成28年12月12日、事業者より土浦市教育委員会文化課に、事業計画地における埋蔵文化財の取扱について照会文書が提出された。事業計画地が周知の遺跡である山王遺跡（土浦市遺跡番号203-350）に該当するため、事業者と市教育委員会との間で協議し、試掘確認調査を実施することで合意した。平成29年1月13日、事業者より埋蔵文化財試掘確認調査依頼が提出され、2月21日に試掘確認調査を実施したところ、古墳時代の堅穴建物とみられる遺構が多数発見された。この結果を受けて今後の取扱を協議したところ、建物部分に地下掘削を行わず、土盛りによって現状保存を測るとともに、地下掘削を伴う雨水浸透層部分について、事業者負担による発掘調査を行うことで合意した。

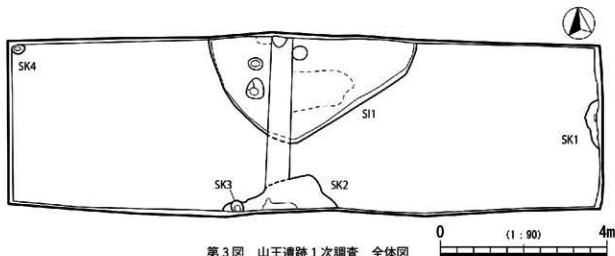
文化財保護法に基づく第93条の届出は、平成29年3月16日に茨城県教育委員会に進達し、3月28日付文第3415で発掘調査を実施するように県から通知がなされた。これを受けて、平成29年4月14日に市教育委員会、事業者、民間発掘調査会社による、埋蔵文化財の保存と発掘調査に関する三者協定を締結した。同日、事業者、民間発掘調査会社間で山王遺跡埋蔵文化財発掘調査支援委託契約を結び、市教育委員会と民間発掘調査会社間では発掘調査支援委託に関する覚書を締結した。

発掘調査は平成29年4月25日から開始し、文化財保護法第99条に基づいて、4月27日付土教委発第580号にて、茨城県教育委員会に発掘調査の報告を行った。調査は5月7日まで実施し、発掘調査終了確認を5月9日付土教委発第635号にて依頼した。茨城県教育委員会は5月23日付文第402号にて調査終了を確認した。埋蔵物発見届は5月9日付で土浦警察署に提出し、9月13日付文1518号にて文化財と認定された。発掘調査終了後は、平成30年3月まで整理作業を実施した。



第1図 遺跡位置図 (常陸高浜1/25,000)

第2図 山王遺跡調査区配置図



第3図 山王遺跡1次調査 全体図

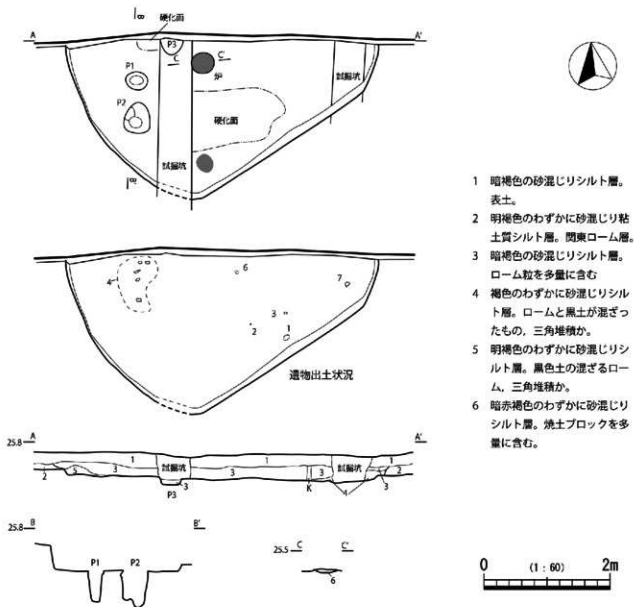
2. 遺跡の環境

山王遺跡は霞ヶ浦を南に臨む、土浦入り左岸の台地上に立地する(第1図)。標高は約25m程度、調査区の現況は畑であった。分布調査で土師器、須恵器が採集されたことから平安時代の遺跡として登録された(土浦市教育委員会1984)。近隣住民の話では、かつて古墳があり、石棺が発見されたとのことであった。試掘確認調査では古墳らしき痕跡は発見できなかったが、近隣住民の案内で当地から出土したといわれる石棺材を実見することができた。石棺材は遺跡から少し離れた資材置き場にあり、1×1m程度、筑波山麓で産出する変成岩(雲母片岩)2枚であった。

調査区は遺跡範囲のほぼ中央、東西を長軸とする4×14mとした(第2図)。

3. 発見された遺構と遺物

本調査で発見されたのは古墳時代前期の竪穴建物1軒、古墳時代から近世の土坑4基であった(第3図)。



第4図 第1号竪穴建物

第1号竪穴建物 (SI1: 第4図)

位置 調査区中央、北よりで検出された。

規模 おおむね南半分ほどを検出しており、一辺約4m程度と考えられる。

壁 確認面から床面までの深さは20cm程度を測り、立ち上がりは緩やかで不明瞭である。

床 住居中央と南寄りの部分に硬化面が認められた。

柱穴 P1, P2ともに床面からの深さ50cm程度を測り、主柱穴と思われる。

炉 住居中央に直径30cm程度の地床炉が認められた。南隅にも焼土の分布が認められたが、明瞭な炉床面は検出されなかった。

覆土 3層に分層された(3~5層)。壁際の三角堆積と思われる、黒土とローム層が混ざった堆積物が認められたことから(4,5層)、自然埋没か。

遺物(第8図) 土師器を中心として若干の遺物が出土した。1~3は赤彩された土師器の椀や皿で、古墳時代前期のもの。5は焼成の甘い土師器の胴部片で甕か甔と思われる。5~7は縄文時代の遺物

である。4は繊維の混入が見られ、竹管による刺突文が施されることから花積下層式～黒浜式か。6には繊維が含まれず、半裁竹管による沈線や押し引き文が見られることから浮島式I式と考えられる。7は敲石。

所見 カマドではなく炉をもつことと、出土遺物から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第1号土坑 (SK1: 第5図)

位置 調査区の東壁中央にかかって検出された。

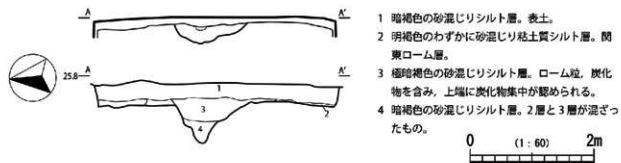
規模と平面形 全体を検出していないが、確認できた部分で長軸1.2m、短軸30cm程度を測り、不整な円あるいは楕円形を呈すると思われる。

断面形 明瞭な底部は認められず、V字状に掘り込まれている。立ち上がりは北のほうが急で、南が緩やかである。

覆土 2層に分層された(3,4層)。ともにローム粒を含み淘汰が悪く、人為的に埋め戻されたものと思われる。とくに3層上端には炭化物の集中が認められ、埋め戻しに伴って何らかの燃焼行為が行われた可能性がある。

遺物 土師器の小片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

所見 出土遺物から古墳時代の土坑と考えられるが、性格は不明である。



第5図 第1号土坑

第2号土坑 (SK2: 第6図)

位置 調査区中央、南壁にかかって検出された。

規模と平面形 全体を検出していないが、確認できた部分で長軸2.7m、短軸80cm程度を測り、方形あるいは不整円形を呈すると思われる。

断面形 皿状を呈し、確認面からの深さ25cm程度を測る。

覆土 2層に分層された(3,4層)。ロームブロックを含み淘汰が悪いため埋め戻し土と考えられる。

遺物 土師器が数点出土した。第8図8は赤彩された椀の口縁部片。

所見 出土遺物から古墳時代前期の土坑と考えられるが、性格は不明である。

第3号土坑 (SK3: 第6図)

位置 調査区中央南壁、第2号土坑を切って掘り込まれている。

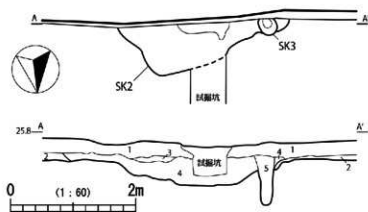
規模と平面形 直径30cm程度の円形を呈する。

断面形 壁はほぼ垂直に立ち上がっており、深さ75cm程度を測る

覆土 ローム粒を含むしまりのない堆積物であり、埋め戻し土と思われる。

遺物 土坑底部から、土師質土器の小皿が入れ子状に重なって出土した。図化できなかった1個体を含めると7点が出土している。図化できた第8図9～14は、器形やサイズにバリエーションがあるものの、すべてロクロ成形であり底部に糸切痕を残す。また、口径と底径の差が小さく、底部の器厚が薄いといった特徴がみられる。こうした特徴は、17世紀後半から18世紀前半に位置づけられる、尻替遺跡第2号竪穴遺構出土土器（土浦市教育委員会2007）にもみられる。また、18世紀後半から19世紀第1～2四半期と推定される土浦城外丸御殿の盛土層からも、類似した資料が出土している（土浦市教育委員会1996）。これらのことから、第3号土坑出土資料は18世紀ごろに位置づけられよう。

所見 出土遺物から近世の土坑と考えられる。底部にかわらけを埋納してあることから、柱穴の可能性もある。



第6図 第2、3号土坑

- 1 暗褐色の砂混じりシルト層。表土。
- 2 明褐色のわずかに砂混じり粘土質シルト層。関東ローム層。
- 3 明褐色の砂混じりシルト層。黄褐色のロームブロックを多量に含む。再堆積したロームと黒土が混ざったもの。
- 4 暗褐色の砂混じりシルト層。ローム粒を多量に含む。ロームをブロック状に含み、埋め戻し土か。
- 5 褐色のわずかに砂混じりシルト層。ローム粒を中量含む。4層と比べてローム粒が少ない。下位ほどしまりがなくなる。

第4号土坑（SK4：第7図）

位置 調査区北西隅で検出された。

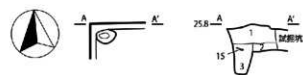
規模と平面形 長径30cm、短径20cm程度の楕円形を呈する。

断面形 底は平坦で、確認面からの深さ50cm程度を測る。壁は急角度で立ち上がる。

覆土 炭化物、ロームを少量含む堆積物で、上下で変化に乏しいことから埋め戻し土か。

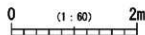
遺物 土師質土器の播鉢が1点出土した（第8図15）。雲母を含むなど在地の胎土をもち、瀬戸美濃系陶器（大窯期）の播鉢（愛知県史編さん委員会2007）を模倣した形態であることから、帰属時期は16世紀ごろと考えられる。

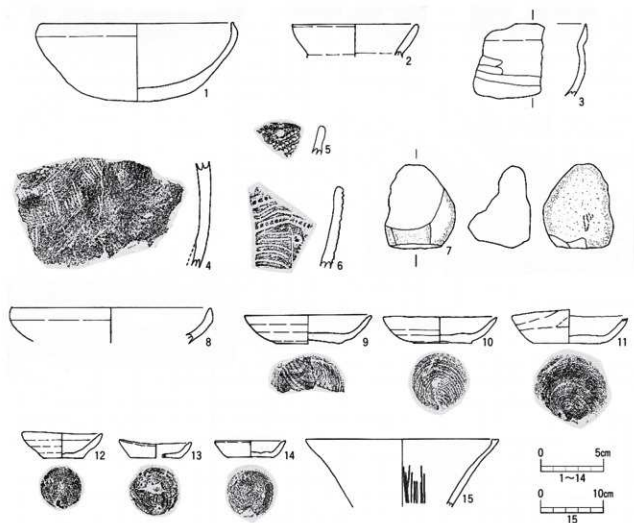
所見 出土遺物から中世の土坑と考えられるが、性格は不明である。



第7図 第4号土坑

- 1 暗褐色の砂混じりシルト層。表土。
- 2 明褐色のわずかに砂混じり粘土質シルト層。関東ローム層。
- 3 褐色の砂混じりシルト層。炭化物粒、ローム粒を少量含む。





第8図 山王遺跡 出土遺物
 (1～7 : SI1, 8 : SK2, 9～14 : SK3, 15 : SK4)

4.まとめ

今回の調査では、縄文時代から近世までの遺物が確認された。遺構としては古墳時代前期の竪穴建物1軒、土坑2基、中世の土坑1基、近世の土坑1基が検出された。

山王遺跡は、これまで奈良・平安時代の遺跡として登録されていたが、伝聞ではあるが石棺が出土しており、今回の調査で建物跡も発見されたことから古墳時代の集落跡であることが明らかとなった。また、遺構に伴うものではないが、縄文土器の出土から縄文時代前期前葉から土地利用があったことがわかった。さらに、中近世にも利用されており、第3号土坑から出土した近世かわらけは、入れ子状に埋納してあったことから一括性が高い事例である。

引用文献

- 愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
 土浦市教育委員会1984『土浦の遺跡』
 土浦市教育委員会1996『土浦城（外丸御殿跡）』
 土浦市教育委員会2007『尻替遺跡』

表1 山王遺跡出土遺物観察表 (A:口径 B:底径 C:器高。石器はA:長さ、C:厚さ)

掲載番号	種類器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴	出土遺構
1	土師器碗	A15.2 C6.2	長石少量、白色粒多量	明赤褐色	普通	丸底の碗。底部から縁やかに立ち上がり口縁部は内湾する。	外面口縁部～胴部はナデ。胴下部～底部は手持ちヘラケズリ。内面ナデ。赤彩。	SI1
2	土師器碗?	A10.0 C[2.6]	雲母、長石少量、白色粒多量	明赤褐色	普通	外反して開く口縁部。輪あるいは増と思われる。	内外面ともにナデ。赤彩。	SI1
3	土師器埴	C[5.7]	長石少量、白色粒多量	にぶい赤褐色	普通	丸みを帯びた胴部から口縁部が外反する。	外面胴部にヘラケズリ、その他ナデ。内面ナデ。赤彩。	SI1
4	土師器壺か瓶	C[8.3]	石英、長石多量、赤色スコリア少量	暗赤灰色	不良	丸みを帯びて立ち上がる胴部片。	外面は多方向のヘラケズリ、内面はナデ。	SI1
5	縄文土器深鉢	C[2.3]	石英、長石中量、繊維混入	内面黒褐色外面にぶい黄褐色	普通	波状口縁の波頂部か	地文単筋RL縄文、口縁に竹管による刺突文。	SI1
6	縄文土器深鉢	C[6.4]	石英、長石中量	にぶい黄褐色	普通	波状口縁をもつ深鉢の口縁から胴部片。	半截竹管による沈線、押し引き文、竹管による刺突文がみられる。	SI1
7	石器敲石	A6.6 B4.9 C[4.9]	花崗岩?	にぶい黄褐色	一	直角稜を用いた敲石。平坦な下面に敲打痕が認められる。	ところどころ赤化しており被熱した可能性がある	SI1
8	土師器碗	A[15.7] C(2.8)	石英少量、白色粒多量	明赤褐色	普通	内湾する口縁部片。	内外面ともにナデ。赤彩。	SK2
9	土師質土器小皿	A[10.0] B[5.0] C2.2	白色粒中量	にぶい橙色	普通	わずかに上げ底状を呈する底部から、糸切で生じた段差を経て、わずかに内湾して立ち上がる。	内外面ともに回転台ナデ。底部回転糸切痕。	SK3
10	土師質土器小皿	A9.0 B4.5 C2.0	長石、白色粒少量	橙色	普通	わずかに上げ底状を呈する底部から、糸切で生じた段差を経て、内湾して立ち上がる。	内外面ともに回転台ナデ。底部回転糸切痕。	SK3
11	土師質土器小皿	A[9.2] B5.7 C2.6	長石、白色粒、赤色スコリア少量	橙色	普通	平底の底部から内湾して立ち上がる。歪みが激しい。	内外面ともに回転台ナデだが、外面のナデは斜めに上がる部分がある。底部回転糸切痕。	SK3
12	土師質土器小皿	A6.4 B3.2 C1.9	長石、白色粒、赤色スコリア少量	にぶい橙色	普通	平底の底部からいったん外反し、内湾して立ち上がる。	内外面ともに回転台ナデ。底部回転糸切痕。	SK3
13	土師質土器小皿	A5.7 B4.0 C1.1	白色粒、雲母少量	明赤褐色	普通	平底の底部から直線的に立ち上がる	内外面ともに回転台ナデ。底部回転糸切痕。	SK3
14	土師質土器小皿	A5.6 B3.7 C1.3	白色粒、雲母少量	にぶい褐色	普通	平底の底部からわずかに内湾して立ち上がる。	内外面ともに回転台ナデ。底部はナデ消されており切り離し方法は不明。	SK3
15	土師質土器深鉢	A[30] C[10.5]	長石、雲母多量	明赤褐色	普通	胴部は外反して立ち上がり、口縁部でわずかに内湾する。口唇部は肥厚して平坦となる。	外面回転台ナデ。内面は回転台ナデ後、二本一組の棒状工具で掻目を刻む。	SK4

報告書抄録

ふりがな	かみたかつかいづかふるさとれきしのひろばねんぼう							
書名	上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報 第24号—2017(平成29)年度—							
副書名	山王遺跡発掘調査報告書							
編著者名	亀井 翼	著者名	亀井 翼					
編集機関	上高津貝塚ふるさと歴史の広場							
所在地	〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843 TEL 029-826-7111							
発行機関	土浦市教育委員会							
所在地	〒300-0036 茨城県土浦市大和町9番2号 TEL 029-826-1111 (代表)							
発行年月日	西暦2019年(平成31年)2月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺構番号	北緯	東経	2017年 4月25日～ 5月7日	56㎡	集合住宅 建設
さん のう い せき 山王遺跡	つららら し たむらまら 土浦市田村町 あざでころ 字出口2096番5	203	350	36度 5分 21秒	140度 11分 17秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山王遺跡	集落跡	古墳時代	堅穴建物1軒 土坑2基		土師器(椀、埴、甕)		古墳時代前期の集落跡。	
		中世	土坑1基		土師質土器(播鉢)		出土遺物から16世紀ごろに位置づけられる。	
		近世	土坑1基		土師質土器(小皿)		かわらけを入れ子状に重ねて埋納した遺構。18世紀に位置づけられる。	



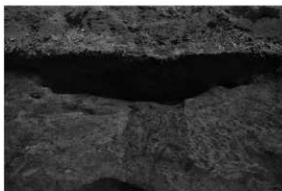
完掘状況



第1号堅穴建物



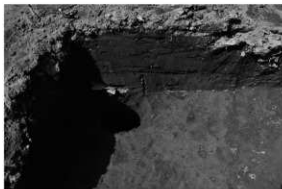
第1号土坑



第2、3号土坑



第3号土坑遺物出土状況



第4号土坑



第1号竖穴建物出土遺物(1)



第1号竖穴建物出土遺物(2、3)



第3号土坑出土遺物
(上段左から9~11、下段左から12~14)



第4号土坑出土遺物(15)